

モーツァルトのシンフォニーにおける トランペットの使用法

岸 啓子・片岡孝子
(音楽研究室)

はじめに

本稿は、シンフォニーにおいてモーツァルトが如何にトランペットを使用しているかを明らかにするものである。一般にモーツァルトはトランペットを好まなかったとされ、実際のところ、同じ金管楽器であってもホルン程には重要な役割や魅力的な旋律を与えられることは少ない。しかしモーツァルトが初めて書いた協奏曲はトランペットのためのものであり^(注1)、モーツァルトがトランペットを熟知していたことは間違いない。

モーツァルトがトランペットを使用しているシンフォニーを対象に、その全体的特色、トランペットを含む場合の編成上の特徴、作品の調性とトランペットの管の調の関係、トランペット・パートの旋律の構成音、倍音の使用状態とその出現頻度を調べ、同種の楽器である（そして、モーツァルトが好んだとされる）ホルンや、トランペットと一組として現れるティンパニ^(注2)との比較を通して、彼のトランペットの使用法を明らかにしてゆく。各パートの構成音と倍音の出現頻度の分析にあたっては、それぞれの音符の音高と音価を倍音別に集計する方法をとった。

1 モーツァルトの時代のシンフォニー

1) シンフォニーの定義

シンフォニー（シンフォニア Sinfonia）は、18世紀最初の20年間にイタリア・オペラの序曲を母胎として生み出され、急—緩—急の三部分からなる形式として定着した。A. スカラッティ（Alessandro Scarlatti 1660-1725）、L. ヴィンチ（Leonardo Vinci 1690ca-1730）、G. B. ペルゴレージ（Giovanni Battista Pergolesi 1710-1736）等が3つの部分からなるシンフォニア（シンフォニー）をオペラの序曲として作曲した時代が続いて、G. B. サンマルティーニ（Giovanni Battista Sammartini 1700/01-1775）、B. ガルッピ（Baldassare Galuppi 1706-1785）、J. シュターミツ（Johann Stamitz 1717-1757）等が、オペラの序曲としてではなく、独立した器楽曲としてのシンフォニーを作曲した。18世紀半ばにシンフォニー（交響曲）は器楽曲の主要なジャンルとしての発展し、1750年代後半からは、ウィーン古典派に繋がるシンフォニスト達が一斉に活躍を始める。しかし一方では、オペラ序曲として作曲されたシンフォニー

の中にも、オペラの上演から切り離され、演奏会用器楽曲として人気を博すものもあり、一般的には、シンフォニーは18世紀を通して、オペラの序曲との両義性を保持していたと言える。

モーツァルトの時代のシンフォニーは、オペラの序曲から独立を果たしたものの、その互換性を完全に脱しきるには至らず、モーツァルトの初期のシンフォニーの中にも、自作のオペラの序曲を転用したもの、或いは、作曲後に序曲として用いられたものが含まれている^(注3)。

さらに、シンフォニーは、バロック時代、器楽合奏を表す言葉であり、モーツァルトが作曲を始めた時代にも、器楽曲を意味する広義の用法も残存しており、彼自身、自作のセレナーデをシンフォニーと呼ぶこともあった(1782年7月20日、27日父宛て)。石井宏は18世紀のシンフォニー、ひいてはモーツァルトのシンフォニーの概念を、1) 器楽曲一般(セレナーデ、マーチ、ダンスを含む)、2) 劇場の開演前の音楽、3) 声楽を中心とした当時のコンサートの開演前の音楽、を含んだものとして広く捉えることを提唱している。

以上のような事情から、現代のモーツァルト研究においては、所謂交響曲の概念では把握しきれない器楽曲や序曲までもシンフォニーに含める方向にあるが、実際にどこまでをシンフォニーと数えるかは諸説ある。本稿では問題の複雑化を避け、交響曲としての典型という意味で、^(注4) 従来から一般に親しまれてきた第1番から第41番の番号付けされた曲を対象とした。

2) オーケストラの編成と規模

18世紀のオーケストラは、宮廷や劇場、または教会に所属し、主に王侯貴族をパトロンとし、市民によって運営されるものは稀であり、また、その編成やサイズは、地域や土地柄、パトロンの経済力や好みによって、大きく異なっていた。18世紀の末には、大オーケストラの標準的編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2 or 4、トランペット2、ティンパニと弦楽器という形に落ちついたが、モーツァルトがシンフォニーを作曲していた18世紀後半は、2管編成のような定型的なものはなかった。例えば、ルソーの音楽辞典(1768)(Jean-Jacques Rousseau 1712-1778)によれば、1754年当時の最もよい編成は、ドレスデンのザクセン選帝付オーケストラであり、第1ヴァイオリン8、第2ヴァイオリン7、ヴィオラ4、チェロ3、コントラバス3、フルート2、オーボエ5、ファゴット5、ホルン2、ハープシコード2となっているが、このオーケストラのバランスと、クラリネットとトランペットを欠く楽器編成は、盛期古典派とは異なる音楽の感覚と嗜好を示している。管楽器のクラリネットは、1770年代のパリやマンハイムでは既に編成に加えられていたが、他の地域ではまだ一般的ではなくモーツァルトのザルツブルク時代は、定員化されていない。モーツァルトを始めとする当時の作曲家は、自分の使うことのできるオーケストラの楽器や奏者の人数の枠内で、作品の楽器編成をすることを余儀なくされていたのであり、これはとりわけ管楽器について言えることであった。

モーツァルトがそのためにシンフォニーを作曲したオーケストラ、当時彼のシンフォニーを演奏したと思われるオーケストラ、あるいは彼の旅行先の町や宮廷のオーケストラでその数と編成が明らかなものは表1のとおりである(N. ザスロウのまとめと監修による)^(注5)。

表1 モーツァルトのオーケストラ

場所：オーケストラ															
Date	vn. I	vn. II	va.	vc.	db.	fl.	ob.	cl.	bn.	hn.	tpt.	timp.	kbd.	misc.	TOTAL
LONDON : Covent Garden															
1757-8	(4)	(3)	(2)	(2)	(1)	(0)	(2)	(0)	(1)	(2)	(2)	(1)	(1)	(0)	21
1760	(4)	(3)	(1)	(1)	(1)	(0)	(2)	(0)	(1)	(2)	(2)	(1)	(1)	(0)	19
AMSTERDAM : Schouwburg Theatre															
1768	3	3	0-2	1	1	0	2	0-2	1	2	0	1	1	0	17
THE HAGUE : Court of Orange															
1766	6	5	4	3	2	0-2	2-4	0	2	4	(2)	1	1	0	34
SALZBURG : Court															
1767-77	4-6	4-6	(2)	1-2	2-4	0	2	0	2-3	2-3	(2)	(1)	(1)	3	tbn.23-35
VIENNA : Kartnerthortheater															
1773-5	6	6	3	3	3	1	2	0	2	2	0	0	1	0	29
VIENNA : Burgtheater															
1773-5	7	7	4	3	3	2	2	0	2	2	0	0	1	0	33
CREMONA : Municipal															
1770S	5	5	2	1	3	0	3	0	0	2	0	0	1	0	21
MANTUA : Concert															
1770	3	3	2	1	2	0	2	0	1	2	0	0	2	0	18
FLORENCE : Concert															
C.1780	4	4	2	1	1	0	2	0	0	2	2	(1)	1	0	19-20
MILAN : Opera															
1770	14	14	6	2	6	0-2	0-4	0	2	4	2	(1)	2	0	57
NAPLES : Opera															
1773	16	16	4	3	4	0	4	0	?	?	4	?	2	?	53+
TURIN : Opera															
1774	15	13	5	4	6	—	6	—	4	4	2	1	2	0	62
PARIS : Concert spirituel															
1778	11	11	5	8	5	2	2	2	4	(4)	(2)	1	0	0	57
SALZBURG : Court															
1779-81	6	6	2	2	4	0	5	0	3	2	(2)	(1)	(1)	0	34
PRAGUE : Opera															
1787	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	0	26
VIENNA : Burgtheater															
1781-3	6	6	4	3	3	2	2	2	2	4	2	1	1	0	38

* カッコ内は、N. ザスロウによる推定。

2 トランペットについて

1) モーツァルトの時代のトランペットの種類

「トランペット (trumpet) の語源は、高地北ドイツ語に発生した「トルンバ (trumba) であるとされ、また「トルンボーノ (trumbono) という語形は8世紀のイタリア語の資料に出てくる。イギリスでは、「トロンプェット (trompette) または (トランベッタ (trumbetta) がトランペットを意味したようである。

ルネサンス期以降、一般にトランペットと呼ばれるものは、円筒型の管の長さが全体の3分の2、円錐形のベルの長さが3分の1となっている。

◇ナチュラル・トランペット (natural trumpet)

18世紀のナチュラル・トランペットは、バロック期の形状がほぼそのまま使用されているも

のである。全長55～80cmで、2本の直管、2つの屈曲管、そしてベルの部分からなっており、ベルの縁は10～11cmに広がっている。大抵の楽器は真鍮製だが、儀礼用に造られた銀製のものも見られる。

現存する楽器の多くはドイツ製で、そのほとんどがニュルンベルクの製造者によるものであり、ノイシュ (Neuschel)、シュニッツァー (Schnitzer)、ハインライン (Hainlein)、コーディシュ (Kodisch)、エーエ (Ehe)、ハース (Haas) などの一族の名前が残っている。ドイツ製トランペットは、マウスパイプとベルが狭い距離で平行しており、木製のスペース・ブロックを間に挟んで房付きの縄で縛ってある。

次に数が多いのは、イギリス製の楽器である。イギリス製トランペットでは、マウスパイプとベルはほぼ接している。ナチュラル・トランペットには、通常ベルの管の中間部分に紡錘形もしくは球形に近い突起 (boss) が取り付けられているのだが、イギリス製の楽器ではマウスパイプがしばしば巨大な突起の溝或いは穴の中を通っていることすらある。

どちらの楽器も、管同士は入れ子式のつなぎ方をしており、(おそらく管内を掃除するために) 取り外しができるようになっている。はんだ付けが行なわれるようになったのはより後の時代であるが、それ以前にも蠟のような非永続的なもので接着されることはあった。

この楽器では、倍音列以外の音を演奏することはできないが、替え管 (crook) が考案され、より低い調を演奏するために音程を下げるできるようになった。

この形状の楽器のほかにも、螺旋状に巻かれた形に作られたトロンバ・ディ・カッチア (tromba da caccia) と呼ばれるナチュラル・トランペットが存在する。この楽器は、テレマン (Georg Philipp Telemann, 1681～1767) の「ヴァイオリン協奏曲へ長調 (DDT. 24) でも使用されているもので、アルテンブルクが「いわゆるインヴェンション、或いはイタリアのトランペット (Inventions または italiänische Trompete)」と呼んだものと同一である。この形状は、ハンド・ストップの奏法を使用するためのものではなく、便利さのために考案されたものであったらしい (旗や飾りのたくさんついた長いトランペットは、見た目はよいが楽団席などの狭い場所で演奏する際には不便なこと甚だしかっただろう)。

しかし帝国トランペット鍋型太鼓奏者組合は、トロンバ・ディ・カッチアを使用することを禁止し (1736年)、また「普通のトランペットのような音はしない」という文章が、1619年のプレトリウス (Michael Praetorius, 1571～1621) の記述の中に見られる (もっともアルテンブルクは、この記述の示す楽器はホルンであるとしているが)。それでも、スミサーズ (Don LeRoy Smithers, 1933～) は「17～18世紀の音楽家を描いた絵画・彫版・デッサンに見られるこの楽器がしばしばホルンと誤認されるのはもっともである」と述べており、この時代には割合多用されていた楽器であるらしい。

なお、トロンバ・ディ・カッチアはドイツやイギリスにおいて「クラリーノ」とも呼ばれることもあるが、これは明らかに誤用であり、モーツァルトがトランペットをクラリーノの名で指定していても渦巻き型の楽器の使用を求めるためのものではない。

◇キー・トランペット (Klappen-trumpete)

キー・トランペットは、管の2箇所を平行に曲げ返された形状に数個のキーが付けられ、自由に半音階を演奏するために作られた楽器である。記録に残る最初のキー・トランペットは、18世紀後期のドレスデンのトランペット奏者の手によるものであるが、1792年頃にハンブルクのネスマン (C. F. Nessmann) が作ったものが最初である (つまりモーツァルトはキー・ト

ランペットの実用化には間に合わなかったわけである)。それとは別に、1個だけキーを持ち、部分的に倍音列以外の音を出すことのできるトランペットの存在が1760年頃の記録にまで遡ることができるが、モーツァルトがこの種の楽器を指定している様子は見られない。

◇ストップ・トランペット 〈Stop-trompete〉

ハンペル (Anton Joseph Hampel, 1770~71) が1750年に初めてホルンの演奏で使用したハンド・ストップピングの奏法を最初にトランペットに応用したのはカールスルーエのヴェッゲル (Michael Wöggel) で、1774年のことである。この楽器は替え管がスライドのところにあり、ベルはやや下向きに曲げられていた。ベルに手を入れることによって倍音の部分音を変化させ、半音階を自由に演奏したのである。また、1820年にフランスのフレール (Courtois Frères) が製作した半月型トランペット (trompette demilune) にも似ている。もっとも、ヴェッゲルのストップ・トランペットは、どちらかといえばインヴェンション・トランペットに含められるものである。

フランスではストップ・トランペットはG管で造られ、トロンペット・ダルモニー (trompette d'harmonie) と呼ばれた。これは軍楽用にE♭管で作られた、ハンド・ストップ奏法を使わないトロンペット・ドルドナス (trompette d'ordonnance) と対立するものである。

ドイツのストップ・トランペットは通常F管で作られ、音程を下げるために替え管が付けられている。初期のストップ・トランペットのいくつかはニュルンベルクのヨハン・レオンハルト・エーエ (III) (Johann Leonhard Ehe III, 1700~71) によって作られたが間もなく、例えばミュンヘンのザウルレ (Michael Saurle) など他の地方の製造者がより重要になり、ニュルンベルクは金管楽器の製造の中心地とはいえなくなった。

◇インヴェンション・トランペット 〈Inventions trompete〉

トロンバ・ディ・カッチアをこの名で呼ぶこともあるが、一般的には楽器の中間部もしくは屈曲部にU字型のチューニング・スライドを持ったストップ・トランペットの変種を指す。この型もホルンから応用されたもので、ハンペルの最初のインヴェンション・ホルンをドレスデンのヴェルナー (J. Werner) が1753年に製作している。トランペットにおいては、1796年にベルリン宮廷の楽器製作者であったクラウゼ (A. F. Krause) がインヴェンション・トランペットを製作したという記録が見られる。

◇フラット・トランペット 〈flat trumpet〉

特にイギリスで製作された、初期のスライド・トランペットがフラット・トランペットである。ルネサンス期のヨーロッパ大陸のものとは異なり、奏者の顎に近い側のU字管がスライドになっていた。

フラット・トランペットの名称は、短調の曲を演奏することが出来るためについたものであり、パーセル (Henry Purcell, 1659?~95) の2つの作品が知られている。

18世紀後半に、この楽器を改良したスライド・トランペットが作られ、それ以降のフラット・トランペットに関する記録は残っていない。

◇スライド・トランペット 〈slide trumpet〉

スライド・トランペットと呼ばれるものには2種類ある。1つは、15世紀初期に作られた、マウスパイプをスライドさせる方式のものである。

それとは別に、18世紀後半にフラット・トランペットの改良型として作られたスライド・トランペットがある。この楽器は手で直接スライドを引くのではなく、入れ子式の棒に固定され

た引き金を人差し指と中指で引いて操作したのである。

スライド・トランペットはイギリスを代表する楽器だが、1815年以降はパリでも製作された。しかしフランス式の楽器はスライドの位置がイギリス式のものと逆で、前へ引き出すようになっている。しかしこの楽器はあまり成功しなかった。

モーツァルトは特に改変型トランペットの使用に言及したことはなく、彼のトランペット・パートはナチュラル・トランペットを前提に作曲されたと考えられている。トランペットに大幅の改良が加えられてヴァルヴ・トランペットが誕生し、それまでのナチュラル・トランペットでは殆ど不可能であった倍音以外の音が演奏可能となったのは、彼の死後約30年経ってからであった。

◇ヴァルヴ・トランペット 〈ventil-trompette〉

ヴァルヴによって金管楽器で半音階を演奏する試みとしては、1814年にシュテルツェル (Heinrich Stölzel, 1772～1844) によるヴァルヴ・ホルンが初めてベルリンで紹介された。シュテルツェルが1818年に協力者のブリュメル (Friedrich Blühmel) と共同で特許を取った箱型ヴァルヴは、1820年にトランペットに応用された。現在使用されているピストン・ヴァルヴ (Pumpventil) は、ペリネ (François Périnet) が1839年にシュテルツェルの発明した管状ヴァルヴを改良したものである。

ロータリー・ヴァルヴは、早い時期にシュテルツェルかブリュメルが発明したものが存在する。しかし、1832年にはリードル (Joseph Riedl) がこれとは無関係に、ラート・マシーネと呼んだロータリー・ヴァルヴの特許を取っている。

ヴァルヴ・トランペットには、同時に2つ以上のヴァルヴを使用すると音程が高くなる欠点があるが、これはヴァルヴのスライド管を簡単に動かせるようにし、演奏者が操作して管を長くするという方法で解決した。こうして完成したヴァルヴ・トランペットは、他の形状に取って代わり、現在もっとも多用され、現代のモーツァルト音楽の演奏にも用いられている。

2) トランペットの奏法

バロック時代には2種類のトランペット奏法が発達し、アルテンブルク (Johann Ernst Artenburg 1734～1801) はフェルトシュトック・ブラーゼン (Feldstuckblasen) とクラリン・ブラーゼン (Clarinblasen) と呼び分けた。これらは一般に“鳴り響かせる奏法”と“単純な奏法”と説明された。この名称は、トランペットとティンパニのアンサンブルの第1声部クラリーノと第2声部プリンツィパーレに由来している。バロック時代にはクラリン・ブラーゼンから発展したクラリーノ音域での独奏 (クラリーノ奏法) が発達し、音域はより高次の倍音へと拡張され、高度な技巧を要する華々しいパッセージやトランペット協奏曲が多く作曲された。古典派の時代になるとクラリーノ奏法は消滅し、トランペットは合奏用楽器として使用されることが殆どになった。アレグロ楽章の最後を飾るコーダで主役を与えられることがあるものの、高音域を奏する能力より、和音を充填したり、長い持続音を奏するための持久力が求められることの方が多かった。モーツァルトの時代は、旋律的・独奏的・協奏的なバロック時代のトランペットの使用法が消え、オーケストラのなかでの1パートとしてのトランペットの演奏法や使用法が確立されていった変化の時期に相当する。彼のシンフォニーにおけるトランペット・パートは、合奏のなかで、他の弦楽器や管楽器と完全な調和を保ちながらトランペットを如何に用いるか、という時代の問いに彼が出した答えである。

3 モーツァルトのシンフォニーにおけるトランペット —— 結果と考察 ——

1) トランペットを含むシンフォニー

モーツァルトのシンフォニーの中でトランペットを含むものは、表2のとおりであり、41番

表2 モーツァルトの交響曲の楽章構成とトランペットの使用及び呼称

BH	KV	楽 章 構 成	トランペット
1	16	1 : Molto allegro, 2 : Andante, 3 : Presto	
2	??		
3	??		
4	19	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Presto	
5	22	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Molto allegro	
6	43	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro	
7	45	① : Molto allegro, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Molto allegro	Clarino
8	48	① : Allegro, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Molto allegro	Clarino
9	73(75a)	① : Allegro, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Molto allegro	Clarino
10	74	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Allegro	
11	84(73q)	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Allegro	
12	110(75b)	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro	
13	112	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Molto allegro	
14	114	1 : Allegro moderato, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Molto allegro	
15	124	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Presto	
16	128	1 : Allegro maestoso, 2 : Andante grazioso, 3 : Allegro	
17	129	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Allegro	
18	130	1 : Allegro, 2 : Andante grazioso, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Molto allegro	
19	132	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro	
20	133	① : Allegro, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Allegro	Tromba
21	134	1 : Allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro	
22	162	① : Allegro assai, 2 : Andantino grazioso, ③ : Presto assai	Tromba
23	181(162b)	① : Allegro apiritoso, 2 : Andantino grazioso, ③ : Presto assai	Clarino
24	182(166c)	1 : Allegro apiritoso, 2 : Andantino grazioso, 3 : Allegro	
25	183	1 : Allegro con brio, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro	
26	184(166a)	① : Molto presto, 2 : Andane, ③ : Allegro	Tromba
27	199(162a)	1 : Allegro, 2 : Andantino grazioso, 3 : Presto	
28	200(173e)	① : Allegro apiritoso, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Presto	Tromba
29	201(186a)	1 : Allegro moderato, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro con spirito	
30	202(186b)	① : Molto allegro, 2 : Andantino con moto, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Presto	Tromba
31	297(300a)	① : Allegro assai, 2 : Andante, ③ : Allegro	Tromba
32	318	① : Allegro spiritoso, 2 : Andante, ③ : Primo Tempo	Clarino
33	319	1 : Allegro assai, 2 : Andane moderato, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro assai	
34	338	① : Allegro vivace, 2 : Andante di molto piu Allegretto, ③ : Allegro vivace	Tromba
35	385	① : Allegro con spirito, 2 : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Presto	Clarino
36	425	① : Adagio~Allegro spiritoso, ② : Andante, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Presto	Clarino
37	444(425a)	?	
38	504	① : Adagio~Allegro, 2 : Andante, ③ : Presto	Clarino
39	543	① : Adagio~Allegro, 2 : Andante con moto, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Allegro	Clarino
40	550	1 : Molto allegro, 2 : Andante, 3 : Menuetto-Trio, 4 : Allegro assai	
41	551	① : Allegro vivace, 2 : Andante Cantabile, ③ : Menuetto-Trio, ④ : Molto allegro	Clarino

* 交響曲第2番, 3番, 37番, は NWA に記載がない。○で囲んだ数字の楽章は、トランペットが使用されているものである。「トランペット」の項目については、指定されている楽器の名称 (Tromba, Clarino) で記した。

38曲中17曲となっている。金管楽器ではホルンが38曲すべてに用いられ、初期の小編成の場合も (ob, hr, 弦が最も多い) ホルンが欠けることはなく、その重要性は際立っている。トロンボーンは全く用いられていない。木管楽器の編成上の主力はオーボエであり、ザルツブルグ時代のものではフルートを持たない曲も多い。新しい楽器であるクラリネットは極めて選択的に用いられている。トランペットを含んだ場合の楽器編成にはとくに定式的なものは認められないが、伝統に則り、ティンパニは必ずトランペットとセットで用いられている。

大局的にとらえれば、多少の凹凸はあるものの楽器編成は時代とともに拡大する方向にあり、ザルツブルグ時代の32曲中12曲に対して、ウィーン時代の6曲中5曲にトランペットが含まれている。トランペットを持たないウィーン時代のシンフォニーはK. 550 40番であり、軽やかで優美な曲想が楽器編成の決定に影響を与えたと考えられるが、それ以外にも、G管のトランペットをモーツァルトはオーケストラ作品に一度も使っていないことから、G管が身近になかったという楽器の事情によるものでもあると推察される。またこの曲にはティンパニもないが、これはトランペットと離して単独でティンパニを用いる習慣がなかったためであろう。

トランペットが使用される楽章は、第1楽章および終楽章であり、メヌエット楽章があればそこでも用いられる。緩徐楽章の第2楽章でトランペットは用いられないが、ただ1曲、K. 425 36番〈リンツ〉で例外的に使用されている^(注6)。

トランペットは必ず同一調の管を2本一組で用いられ、Ⅱの方がⅠよりやや低い音域を担当している。ホルンもまた常に2本一組であり、トランペットとホルンのバランスは2対2である。ただ1曲例外的に32番 ト長調 K. 318では、2本のトランペットに対してホルンが4本となっている。

2) トランペットの呼び方

モーツァルトはトランペットの指定に、「トロンバ (tromba)」と「クラリーノ (clarino)」の2つの語を使用している。クラリーノは、渦巻き型のいわゆる「トロンバ・ディ・カッチャ」を指すとする説もあるが、これは20世紀のドイツやイギリスでの誤った呼称とするグローヴ音楽辞典の記述に本稿では従うものとする。

クラリーノの用語は、楽器ではなく「クラリーノ奏法」または「クラリーノ音域」を使用するトランペットという意味をもつ可能性も想定できるが、クラリーノの指定を持つ曲の大部分が「トロンバ」に比して高音域で（例えば和声を補強する持続音であっても）書かれているわけではなく、それらを意図した指定とは考え難い。しかし、シンフォニー以外では、4本のトランペットを持ち、それらがクラリーノ2とトロンバ2と区別して記譜されている“Missa Solemnis (KV139 <47a>)”, “Missa (KV66)”, “Missa (KV167)”, “Te Deum Laudamus (KV141)”の4曲の宗教曲において、クラリーノとトロンバの間に明らかな差異が見られ、クラリーノの方がより旋律的な動きを示している。とはいえ、クラリーノの旋律が他の曲におけるトランペットのものと同程度であるのに対して、トロンバの方は全く音楽的興味に欠けるものであり、第1トロンバはほとんどg音（第6倍音）を、第2トロンバはティンパニの1オクターヴ上の音を奏するのみである。しかし、シンフォニーにおいては、クラリーノとトロンバに、これら4曲にみられるほどの差はなく、トランペット・セクションにクラリーノとトロンバの併記の例もない。

クラリーノの表記はどの時期の作品にも見られるが特に初期・後期に多く、一方でトロンバ

は中期に集中している^(表3)。トロンバと指定されている曲にはメヌエットの部分がないことが多い。とはいえ、クラリーノの指定曲にもメヌエットのないものはあり、これとは逆にメヌエットを持つトロンバもあるのだが、やはりクラリーノにメヌエットのような優美な楽章に適する要素を幾分かは認めていたものであらうと推察される。

表3 トロンバ・ルンガ (tromba lunga) の指定が明らかな曲

KV	曲 名	初 演	備 考
87(74a)	Mitridate re di Ponto	ミラノ, 1770	異稿による
111	Ascanio in Alba	ミラノ, 1771	
135	Lucio Silla	ミラノ, 1772	
162	Sinfonie in C	ザルツブルグ, 1773	
202	Sinfonie in D	ザルツブルグ, 1774	

モーツァルトのトロンバには、「トロンバ・ルンガ (tromba lunga)」と指定された曲がある (モーツァルトの自筆譜による)。トロンバ・ルンガは名前が示す通り、特に管を2回曲げ返した形のナチュラル・トランペットであり、螺旋状に巻かれた形のトロンバ・ディ・カッチアと区別して指定するための名称である。

トロンバ・ルンガの指定が明らかな曲は表3のとおりである。「イタリアのトランペット」とも呼ばれるトロンバ・ディ・カッチアがミラノで多用されていたため、ミラノでの作品には、ディ・カッチアではなくと明示しておく必要があったと推定される。他の作品も時期が近いいため、この影響を受けての指定であらう。

3) トランペットの調 (表4)

モーツァルトのシンフォニーに使われているトランペットは、多いものから、D管、C管、Es管 (8, 7, 2) である。トランペットを持つ曲の調はニ長調が最も多く (8曲)、次いでハ長調 (6曲)、変ホ長調 (2曲)、ト長調 (1曲) であり、楽曲の調性と楽器の管の調は、ト長調=C管の例 (32番 K.318) を除いて一致している。トランペットを含む割合が高い調は、ニ長調 (10曲中8曲)、ハ長調 (7曲中6曲) である。一方、ヘ長調 (3曲)、イ長調 (3曲)、変ロ長調 (3曲)、ト短調 (2曲) で、トランペットは用いられていない。これは、当時彼が使うことができたのがD・C・Es管であったことを示している。F・A・B・G管が何故使用されなかったかについては不明である。入手できなかったか、或いはその音色になんらかの欠点が認められたかのいずれかであらう。バロック時代以来、F管やB管は決して稀な管ではなく、特にF管はそのよい響きのために、替え管を使う際の基管とされる場合が多かったが、モーツァルトの場合、F管はヘ長調の“Missa Brevis K.192=186 f”に見られるだけである。

同じ金管楽器であるホルンは、全ての曲に使われ、それに応じて管の種類も多くなっている。またモーツァルトが4本のホルンを使う場合、音量の増強が目的ではなく、短調の曲では平行調と同主調、長調の曲では主調と属調と2種類の調の管を指定することによって、転調に備えて使用可能な音を増やすことを意図している。“32番 ト長調 K.318”では、4本のホルンはG管2本、D管2本となっている。

トランペットの使用される曲とされない曲の差異は楽器の都合のみで論じられるものではない。ハ長調、ニ長調はどちらも明るい印象を与える調であり、変ホ長調は一般に英雄的である

表4 モーツァルトの交響曲の調とトランペットの使用されている曲、及び楽器の管

BH	KV	調性	トランペットの管	BH	KV	調性	トランペットの管
1	16	変ホ長調		22	162	ハ長調	Do/C
2	?	?		23	181(162b)	ニ長調	Re/D
3	?	?		24	182(166c)	変ロ長調	
4	19	ニ長調		25	183	ト短調	
5	22	変ロ長調		26	184(166a)	変ホ長調	Mi b /Es
6	43	ヘ長調		27	199(162a)	ト長調	
7	45	ニ長調	Re/D	28	200(173e)	ハ長調	Do/C
8	48	ニ長調	Re/D	29	201(186a)	イ長調	
9	73(75a)	ハ長調	Do/C	30	202(186b)	ニ長調	Re/D
10	74	ト長調		31	297(300a)	ニ長調	Re/D
11	84(73q)	ニ長調		32	318	ト長調	Do/C
12	110(75b)	ト長調		33	319	変ロ長調	
13	112	ヘ長調		34	338	ハ長調	Do/C
14	114	イ長調		35	385	ニ長調	Re/D
15	124	ト長調		36	425	ハ長調	Do/C
16	128	ハ長調		37	444(425a)	?	
17	129	ト長調		38	504	ニ長調	Re/D
18	130	ヘ長調		39	543	変ホ長調	Mi b /Es
19	132	変ホ長調		40	550	ト短調	
20	133	ニ長調	Re/D	41	551	ハ長調	Do/C
21	134	イ長調					

とされている。これらはいずれも、宮廷や軍楽隊で使用される楽器であったトランペット、また現在でも我々がトランペットに対して持つ印象にふさわしい調性ではないだろうか。

4) トランペットの音

本文末の表5はモーツァルトのトランペットを持つシンフォニーにあらわれたトランペット、ホルン、ティンパニの声部の音高と音価（拍単位、記譜音による）を倍音別に集計したものである。拍単位でなく、発音数を単位としたならば多分第3倍音（G）、第6倍音（g）、第9倍音（d'）が非常に減少するものと思われる。これら3つの音は（特にホルンにおいてであるが）相当に長い持続音として使用されることが多いためである。ほぼすべての音が表中の倍音列内にあるものの、ごく稀に例外もあり、それらについては、枠外に記載した。また「XI'（f' #）」と「XI'（f'）」は同一倍音を唇の動作で変化させるものであるため、別々に数えた。ティンパニの音はこれより2オクターヴ下であるが、便宜上このように記載した。モーツァルトのオーケストラにおいては、バスーン、コンティヌオ、ならびにティンパニは実際の演奏に用いられていても記譜されない場合があり、オーケストレーションを考える際の問題となっている。ウィーン時代シンフォニーではすべて記譜されているためこのような問題はないが初期のシンフォニーでトランペットを持ち、しかもティンパニの声部がないものについては、それを演奏の際補う（トランペットⅡの声部の音から選択して奏する）ことを主張する人達もいる^(注7)。しかしここでは、記譜された声部のみを対象とした。

第7倍音は音程的に低すぎるため伝統的に使われてこなかったが、モーツァルトにおいても同じである。用いられた倍音の最高音は第13倍音、第12倍音、第11倍音、第10倍音の順に、トランペットでは0、9、1、7曲、ホルンでは4、12、1、0曲であり、トランペットでは第12倍音までのものが9曲と最も多いが、第10倍音までの音域の曲も7曲とかなりある。第16倍音

も稀ではなかった華やかなバロック時代の独奏楽器としてのトランペットの面影は全く失われ、音域的にも限定されたものになっている。

モーツァルトはただ一度だけシンフォニーにおいてトランペット声部に倍音列以外の音を記している。“35番 ハフナー ニ長調 K.385” 第44小節のa音（実音でh）である。このaは和声的には間違っていないが、c音（実音でd）の誤記である可能性が高い。同じリズムのホルンはそれぞれc音（実音d）、c音（実音d）であり、ティンパニもD音を叩いている。このようなフレーズでのモーツァルトの常道に倣うなら、ここはc音（実音d）となるべき箇所であり、トランペットだけ異なる音を演奏するのはきわめて異例のことである。しかも彼においては、トランペットⅡとティンパニの音が異なることはまずあり得ない。記譜にあたって第2間と第3間を取り違えることは、起こり得ることであろう。自筆譜を確認することができなかったため、モーツァルト自身の誤記か、或いはNBAの編集の際の手違いかは特定できないが、いずれにせよこのa音は誤記であると推定される。

ホルンの音もまず殆どが倍音列上の音であるが、それ以外の音も稀に見いだされる。“39番変ホ長調 K.543”の終楽章115小節から125小節に見られるホルンの半音階的進行は、おそらくハンド・ストップピング奏法もしくはインヴェンション・ホルンを使用したものであろう。

5) トランペットの記譜法 —— へ音記号の解釈をめぐって ——

モーツァルトの金管楽器の記譜法には決着のついていない一つの問題がある。それはへ音記号の使用についてであり、シンフォニーのホルン・パートに多く見られるが、トランペットでもシンフォニーの他、“ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni K.527”や、K.167の“ミサ”でも、へ音記号でトランペットが記譜されている箇所がある点である。これらの部分では、記譜音通りの音を出すことを求められているようにも見られるが、倍音列に含まれないG音の存在によって、この解釈は否定される。スミザーズは、へ音記号の使用は下線を避けるためであり、異常な低音は、ヒストリカル・トランペットとそれに合うマウスピースを用いれば、十分に鳴り響かすことができる、として記譜通り（オクターヴの変更なし）の音を演奏したとしている。しかし、やはり不自然であることから、これらのへ音記号は、ホルンで時々採られる、へ音記号の音を自動的に1オクターヴ上げて演奏する記譜法の流用とする一般的な解釈の方が妥当であろう^(注8)。それでもまだ第2クラリーノとして異常に低い音域である。

6) トランペットの旋律

この時代のオーケストラの金管楽器は倍音列以外の音を演奏できなかったことを考え併せても、モーツァルトのトランペットやホルンの旋律にはしばしば不自然な動きが見られる。特に目を引くのは1オクターヴ以上の跳躍が頻出することである。トランペットならびにホルンの下側のパートにしばしば9度、時には11度もの跳躍が連続することもある。これらは大抵の場合、幾つかの音を1オクターヴずらすとごく普通の旋律になるのであるが、当時の金管楽器奏者たちにとっては辛いものであっただろうと想像される。もっとも、この時代の他の作曲家の音楽も大抵このようにならざるをえなかったことから、演奏者が意外に跳躍慣れしていたと考えられなくもない。

長い持続音も顕著な特色のひとつである。4小節またはそれ以上の長さの音を奏する箇所がかなり認められる。これらは和声の補強として用いられているもので、ホルンにおいては更に

頻繁にしかもより長大な例が現れ、時には10小節（40拍）に及ぶこともある。

7) オーケストラにおけるトランペットの役割

バロック時代の華々しい活躍から比べると、モーツァルトのシンフォニーのトランペット・パートは同じトランペットでありながら随分と地味になり、音域も限定され、クラリーノ奏法が完全に失われてしまったことを物語っている。高次倍音を使わないことにより、演奏可能な音が制限され、第10倍音までではド・レ・ミ・ソ（記譜音による）の4音、第12倍音まででは、ド・レ・ミ・ファ（ファ#）・ソ（同）（いずれも使用されない第7倍音をのぞく）となり、これでは転調後は言うに及ばず、主調内での旋律進行にも不自由をきたすことは明らかである。

トランペットはその華やかで高貴な音色と強い響きのため、安易に用いれば、オーケストラの中の木管楽器や弦楽器を圧倒してしまう危険があるが、モーツァルトはこのようなトランペットの個性にたいして、極めて慎重な扱いを見せている。彼の場合トランペットに、独奏的に或は協奏風にオーケストラに加わることを基本的に求めなかったと言える。むしろ、他の楽器を補強し、響きを融合させ、リズムを明快にし、和音を充実させるといった、オーケストラの他の楽器との調和と協調のなかで、トランペットの魅力を引き出し、合奏楽器としての可能性を試している。このような方向はトランペットの個性と能力を最大限発揮することには繋がらないが、トランペットに求められた大切な役割であることに相違ない。初期のシンフォニーでは選択的にしか用いられることのなかったトランペットが、中・後期の多くの作品に用いられている事実からも、モーツァルトにとってトランペットが、シンフォニーの楽器編成に無くてはならない重要な楽器となっていたことが理解できる。

このような楽器の用い方の移り変りの背景には、線的な書法から交響的なものへと移行する音楽自体の変化があったことは言うまでもない。

モーツァルトがシンフォニーのなかでトランペットを使用しているのは次のような方法による。

1 和音の内声の補填または補強。

ホルンと同音を重ねる例が極めて多く、トランペットが生で響かないようになっている。長い持続音、大きな跳躍も多用される。

2 フォルテやトゥッティの部分。

音量の増大のためだけでなく、華やかで引き締まった響きや力強い響きが得られる。

3 ティンパニとの共同作業。

楽器編成の際に両者は1セットとされるだけでなく、音楽においても同じ音（特にトランペットⅡとティンパニ）を奏するのが普通である。トランペットがむしろ打楽器を思わせる使いかたをされることも多い。

4 リズムを決める。

トランペットが強拍（第1拍）を打ち、ホルン等が弱拍を受け持つ。細かい音符を奏する他のパートに対してその音型のリズムの骨格を取る。

5 ファンファーレ。

伝統的なトランペットの用法であるがここでは控えめに用いられる。アレグロやプレストの楽章のコーダでファンファーレを想起させるフレーズとして。

モーツァルトのトランペットは強奏やファンファーレに見る力強さの表現のみを追い求めるのではなく、和音の響きの美しさや調和、持続する音の安定した心地よさ、リズムを決める明快さ等多様な表現を体現している。その方法にしばしば共通する特色はトランペットの音をホルンの柔らかな音を媒介として木管楽器や弦楽器と融合させることである。両者の重複は、音量の増加ではなくむしろ響きの変化のためであり、ホルンの立ち上がりの悪い音に明確な輪郭を与えると同時に、トランペットの音色を和らげ、ほかの楽器と融和させるためである。このような融和剤としてのホルンの扱いはモーツァルトに限ったことではないが、それが徹底している点に彼の最大の特色が認められる。

注

- 注1 この作品は1768年にウィーンで初演されたが、現在は遺失している。また、この作品より1年前に書かれたピアノ協奏曲があるが、これは編曲のため、トランペット協奏曲をモーツァルトの最初の協奏曲と考えてよいだろう。
- 注2 むしろトランペットがティンパニに類似した使用をされているという方がより正確である。
- 注3 N. ザスロウの98曲モーツァルトのシンフォニー（逸失作品を含む）の分類によると、第2項 序曲として用いられたシンフォニー（3曲）：K.45, 184=161a, 318 第3項 シンフォニーとして使われた（又は広まった）序曲（7曲）：K51=46a, 111+111a=120, 126+141a=161/163, 135, 196+207a=121, 208+213c=102, K87=74a 第4項シンフォニーとしてそのまま用いられた序曲（4）：K35, 38, 50=46b, 118=74cとなっている。
- 注4 ただし、交響曲2番と3番は存在が推定されるのみであり、また37番は序奏部以外はミヒャエル・ハイドン（Johann Michael Haydon 1737～806）の作であることが判明しているため、実際には38曲を対象とした。
- 注5 Neal Zaslaw : Mozart's Symphonies — context, performance, reception, Oxford, 1989
The status of 98 Symphonies attributed to W. A. Mozart, P545
- 注6 ベートーヴェンはこの曲の第2楽章アンダンテでトランペットとティンパニが生み出す効果に注目し、自作の第1交響曲に応用した。N. ザスロウ ibid. P388
- 注7 N. ザスロウ ibid. P464
- 注8 ウォルター・ピストン：管弦楽法1955, 戸口幸策 訳 P257

参考文献

- ◇Anthony Baines : Brass Instruments Their History and Development, London, 1976
福井一 訳：金管楽器とその歴史, 音楽之友社, 1991
- ◇Dexter Edge : Mozart's Viennese orchestras, Early Music, February 1992, P64～87
- ◇Cliff Eisen : Mozart's Salzburg orchestras, Early Music, February 1992, P89～103
- ◇The New Grove's Dictionary of Music and Musicians
- ◆Reine Dahlqvist : Keyed trumpet, Vol, 10 P42～43
- ◆Stanley Sadie : Mozart, (3) Wolfgang Amadeus, Vol, 12 P680～752
- ◆Edward H. Tarr : Trumpet, Vol. 19 P211～225
- ◇Wolfgang Amadeus Mozart : Neue Ausgabe Sämtlicher Werke, Bärenreiter-Verlag Kassel
- ① Geistliche
Gesangswerke I
- ② Geistliche
Gesangswerke II

③Geistliche

Gesangswerke III

④Bühnenwerke I

⑤Bühnenwerke II

⑥Bühnenwerke III

⑦Bühnenwerke IV

⑧Bühnenwerke V

⑨Bühnenwerke VI

⑩Bühnenwerke VII.

Lieder. Mehrstimmige. Gesänge. Kanons

⑪Orchesterwerke I

⑫Orchesterwerke II

⑬Orchesterwerke III

◇Don LeRoy Smithers : Mozart's orchestral brass, Early Music, May 1992, P255~265

◇Don LeRoy Smithers : The Music and History of the Baroque Trumpet before 1721 (2nd Edition) 5.
The Trumpet 'Guilds', Southern Illinois University, P110~131

◇Neal Zaslaw : Mozart's Orchestras Applying historical knowledge to modern performances, Early Music,
May 1992, P197~205

◇Neal Zaslaw : Mozart's Symphonies — context, performance Practice, Reception — Oxford, 1989.

◇石井宏：モーツァルト交響曲全集（解説），1982

◇国際モーツァルト・シンポジウム組織委員会，国立音楽大学：1991 国際モーツァルト・シンポジウム報告
モーツァルト研究の現在，国立音楽大学，1993

(1995年9月29日受理)

モーツァルトのシンフォニーにおけるトランペットの使用法

表5

交響曲第7番二長調 (Sinfonie in D, KV45)

(1)Molto allegro, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)				16.5	
IV (c)	4	26		52	
V (e)		10		4	
VI (g)	34.5	38.5	23.5	42	30.5
VII (b)					
VIII (c')	32	1	52	25	31
IX (d')	22	18	45.5+2	47	
X (e')	1		26.5	14	
XI (f')			24	2	
XI' (f#')			4		
XII (g')			23		
(a')			2		
(b')					
(h')					
(c')					

*付加分はトリルの音

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)					
IV (c)	1	2		2	
V (e)		3		2	
VI (g)	3	13		8	11
VII (b)					
VIII (c')	3	2	4	5	6
IX (d')	16	6	18	19	
X (e')	2		5	11	
XI (f')			9		
XI' (f#')					
XII (g')			11		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(3)Molto allegro, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)					
IV (c)	5	10		11	
V (e)		3		2	
VI (g)	13	20	34	61	18
VII (b)					
VIII (c')	8	2	18	15	15
IX (d')	18	11	45	26	
X (e')	2		24	4	
XI (f')			4	4	
XI' (f#')					
XII (g')			4		
(a')			4		
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第8番二長調 (Sinfonie in D, KV48)

(1)Allegro, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)				2	
IV (c)		35.5		53	
V (e)		16		21.5	
VI (g)	2	25.5	10	43	32.5
VII (b)					
VIII (c')	43	11	62	27	24
IX (d')	57.5	35	87.5	52	
X (e')	18		39	3	
XI (f')	3				
XI' (f#')			1		
XII (g')			2		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)					
IV (c)		4		3	
V (e)		3		2	
VI (g)	1	8	1	9	5
VII (b)					
VIII (c')	7	1	5	4	7
IX (d')	11	4	10	5	
X (e')	1		4	7	
XI (f')				3	
XI' (f#')			1		
XII (g')			10		
(a')			3		
(b')					
(h')					
(c')					

(3)Molto allegro, 12/8(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)					
IV (c)		13.3		39.7	
V (e)		7.3		10.3	
VI (g)	4	27.3	18	51.3	23.7
VII (b)					
VIII (c')	16.7	8	42.7	8.3	17.3
IX (d')	28	9.7	75	43	
X (e')	13.7		15.7	0.7	
XI (f')			0.3		
XI' (f#')					
XII (g')			0.7		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第9番ハ長調 (Sinfonie in C, KV73(75a))

(1)Allegro, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)				46	
IV (c)		8	2	13	
V (e)		17	1	22.5	
VI (g)	12	32	61.5	80	11
VII (b)					
VIII (c')	24	9	39	34	15
IX (d')	38	18	92.5	35	
X (e')	10		39	4.5	
XI (f')					
XI' (f#')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)					
IV (c)				8	
V (e)		6		8	
VI (g)		4		18	4
VII (b)					
VIII (c')	6		16	17	6
IX (d')	4		18	2	
X (e')			17	1	
XI (f')			2		
XI' (f#')					
XII (g')			1		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(3)Molto Allegro, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)					
IV (c)		3		71	
V (e)		23		20	
VI (g)	8	30		80	14
VII (b)					
VIII (c')	26	7	96	27	24
IX (d')	36	12	98	27	
X (e')	7		31		
XI (f')					
XII (f#')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第2番ハ長調 (Sinfonie in C, KV162)

(1)Allegro assai, 4/4(J=1, Tromba-Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		21		24
IV (c)	5	92		87
V (e)	3	16		22.5
VI (g)	65	48	24	95
VII (b)				
VIII (c')	95	5	100.5	31.5
IX (d')	16	8	95.5	22.5
X (e')	5		47.5	1.5
XI (f')			6	
XI' (f#')			13.5	
XII (g')				
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

交響曲第2番ニ長調 (Sinfonie in D, KV133)

(1)Allegro, 4/4(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		21.5		21
IV (c)	2	43		66
V (e)	7	37.5	0.5	26
VI (g)	41	88.5	31	96.5+1
VII (b)				
VIII (c')	59.5	22.5	69.5	55.5+5
IX (d')	98.5	3	102+2	48.5+3
X (e')	31	4	63.5+7	19
XI (f')	4		24.5+3	1
XI' (f#')			4	
XII (g')	5		36.5	
(a')			0+2	
(b')				
(h')				
(c')				

*付加分はトリルの音を示す

(2)Presto assai, 6/8(J=1, Tromba-Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		2		11.3
IV (c)	8	20.7		12.7
V (e)	5.3	10.7		16.7
VI (g)	13.3	27.7	16.7	38
VII (b)				
VIII (c')	18.7	7.7	27	21.3
IX (d')	27.7	6.7	30	13
X (e')	6.3	0.3	23	3
XI (f')			6.3	
XI' (f#')			1	
XII (g')	0.7		13	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)				
IV (c)		5		1
V (e)		3		3
VI (g)		18		18
VII (b)				
VIII (c')	7	6	5	13
IX (d')	23	4.5	22	5.5
X (e')	7	0.5	8	1.5
XI (f')	0.5		3.5	1
XI' (f#')				
XII (g')	0.5		2.5	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

交響曲第2番ニ長調 (Sinfonie in D, KV181(162b))

(1)Allegro spiritoso, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II
III (G)		9		40
IV (c)	8	122		156
V (e)	16	8		4
VI (g)	54	56	40	105
VII (b)				
VIII (c')	119	1	159	75
IX (d')	48	34	128	58
X (e')	1		67	2
XI (f')			11	
XI' (f#')			2	
XII (g')			13	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(3)Allegro, 12/8(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)				
IV (c)		32		34.7
V (e)		8.7		6.7
VI (g)	24.7	45.7	2.7	50.3
VII (b)				
VIII (c')	40.7	2.7	31.7	23.7
IX (d')	27.7	6.7	61.3	13.7
X (e')	2.7		30	2.7
XI (f')			4	
XI' (f#')				
XII (g')			3	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(2)Presto assai, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II
III (G)				17
IV (c)	3	78	1	79
V (e)	3	11	1	8
VI (g)	24	41	18	31.5
VII (b)				
VIII (c')	84	5	83	34
IX (d')	24	7	35.5	20
X (e')	4		31.5	20
XI (f')			19	
XI' (f#')				
XII (g')			22.5	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

モーツァルトのシンフォニーにおけるトランペットの使用法

交響曲第2番変ホ長調 (Sinfonie in Es, KV184(166a))

(1)Molto Presto, 4/4(J=1, Tromba-Corno共にin Es)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		22		1
IV (c)	15	48		48
V (e)	8	8	9	19
VI (g)	33	13	17	31
VII (b)				
VIII (c')	42	17	52	8
IX (d')	33	23	46	21
X (e')			21	12
XI (f')			12	7
XI' (f#')				
XII (g')				
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(2)Allegro, 3/8(J=1, Tromba-Corno共にin Es)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		10.7		22.7
IV (c)	10.3	26.3		31
V (e)	2	2.7		14.3
VI (g)	15.7	4	18.7	14
VII (b)				
VIII (c')	14.7		41.3	11.7
IX (d')	5.3	5.3	25.7	24.3
X (e')	0.7		23.3	10
XI (f')			11	
XI' (f#')			9	
XII (g')				
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

交響曲第28番ハ長調 (Sinfonie in C, KV200(173e))

(1)Allegro spiritoso, 3/4(J=1, Tromba-Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		5		2
IV (c)	7	48	5	49
V (e)	9	26	5	24
VI (g)	30	57	15	49
VII (b)				
VIII (c')	62	20	68	43
IX (d')	55	31	60	44
X (e')	12	1	30	7
XI (f')	4		16.5	1
XI' (f#')			2	
XII (g')	8		17.5	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')	1		1	

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Tromba-Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)				11
IV (c)		9		19
V (e)		5		2
VI (g)	3	8	15	11
VII (b)				
VIII (c')	10	2	27	10
IX (d')	8	1	12	11
X (e')	3		7	14
XI (f')	1		8	1
XI' (f#')				
XII (g')			10	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(3)Presto, 2/2(J=1, Tromba-Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		27+4		42+8
IV (c)		60+6		74+10
V (e)	1	1+5		2+4
VI (g)	62+5	41+1	48+8	46.5+1
VII (b)				
VIII (c')	54+11	0+1	81+14	29.5+2
IX (d')	49+1	37+2	61.5+1	50+2
X (e')	0+1	0+1	24.5+2	5+1
XI (f')	0+1		6+2	
XI' (f#')			5	
XII (g')	0+1		23+1	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

*付加分はコードの音

交響曲第30番ニ長調 (Sinfonie in D, KV202(186b))

(1)Molto allegro, 3/4(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		21		13
IV (c)	5	45	10.5	61.5
V (e)		3		12
VI (g)	47	48	50.5	73.5
VII (b)				
VIII (c')	57	17	75	47
IX (d')	37	26	78	40
X (e')	3		32	2
XI (f')	2	2	10	2
XI' (f#')				
XII (g')	7	4	7	4
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		10		9
IV (c)		33		39
V (e)		4		2
VI (g)	16	14	12	20
VII (b)				
VIII (c')	37		41	5
IX (d')	12	7	22	14
X (e')			7	
XI (f')			6	
XI' (f#')				
XII (g')				
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

(3)Presto, 2/4(J=1, Tromba-Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II
III (G)		23		20
IV (c)	20+2	70+2	12+19	75+19
V (e)	8+2	12+2	8+2	14+2
VI (g)	53+2	27+2	34+2	54+2
VII (b)				
VIII (c')	37+2	18+2	75+2	36+2
IX (d')	13	12	48	16
X (e')	5		43	
XI (f')				
XI' (f#')				
XII (g')			2	
(a')				
(b')				
(h')				
(c')				

*付加分はコードの音

交響曲第31番二長調 (Sinfonie in D<'Pariser Sinfonie'>, KV297<300a>)

(1)Allegro assai, 4/4(J=1, Tromba・Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		59	1	93	
IV (c)	31	178	22	196.25	
V (e)	21	17	12	33	
VI (g)	125	84	117	202.5	86
VII (b)					
VIII (c')	154	9	199.5	55.5	183
IX (d')	18	17	210.5	46+1	
X (e')			61.75	9.75	
XI (f')			5+1	3	
XI' (f#')					
XII (g')			9.5		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*付加分はトリルの音

(2)Allegro, 2/2(J=1, Tromba・Corno共にin D)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		77		78	
IV (c)	16	94	17	77	
V (e)	16	30	16	18	
VI (g)	147	87	153	163	102
VII (b)					
VIII (c')	91	8	61	46	130
IX (d')	52	32	166	95	
X (e')	6		60	10	
XI (f')			10		
XI' (f#')					
XII (g')			8	4	
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第32番二長調 (Sinfonie in G, KV318)

(1)Allegro spiritoso, 4/4(J=1, Clarinoはin C, CornoはI・IIがin G, III・IVがin D)

Par. Tone	Clar. I	Clar. II	Corno I	Corno II	Corno III	Corno IV	Timpani G-D
III (G)		3.25		2		12	
IV (c)	2	5	4	22	9.5	108	
V (e)			4.5	44.5	2	20.5	
VI (g)	9.75	28.5	41	76	15.5	25.5	78.25
VII (b)							
VIII (c')	5	18	20	14	127	38.5	23
IX (d')	79	53	69	63	40.25	9.25	
X (e')	12		62	2		12.5	
XI (f')					2		
XI' (f#')							
XII (g')			20		5		
(a')							
(b')							
(h')							
(c')							

(2)Primo Tempo, 4/4(J=1, Clarinoはin C, CornoはI・IIがin G, III・IVがin D)

Par. Tone	Clar. I	Clar. II	Corno I	Corno II	Corno III	Corno IV	Timpani G-D
III (G)				2			
IV (c)	3	3	6.5	59	1	63	
V (e)		4	6.5	20			
VI (g)	17.5	41.5	9.75	36.75	0.25	2.25	35.25
VII (b)							
VIII (c')	4	14	63	19.5	86	28	53.25
IX (d')	67	31	31.5	17.5	17	18	
X (e')	4	2	17.5	3	5		
XI (f')			5		3		
XI' (f#')							
XII (g')			19		1		
(a')							
(b')							
(h')							
(c')							

交響曲第34番ハ長調 (Sinfonie in C, KV338)

(1)Allegro vivace, 4/4(J=1, Tromba・Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		46.5		244.5	
IV (c)	15.75	126.75	13.75	231.75	
V (e)	11	32	3	32	
VI (g)	97.5	60	278.5	86	89
VII (b)					
VIII (c')	122	18	220	36	131
IX (d')	74	23	121	73	
X (e')	9		42	6	
XI (f')			14		
XI' (f#')					
XII (g')			16	9	
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(2)Allegro vivace, 6/8(J=1, Tromba・Corno共にin C)

Partial Tone	Tromba I	Tromba II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		22.7		34.7	
IV (c)	1	27.7		31.7	
V (e)	1.7	3.7	0.7	10	
VI (g)	41.7	35	42.7	51	36
VII (b)					
VIII (c')	29.3	7.3	36	25.7	33.7
IX (d')	44.7	30.7	76	44.7	
X (e')	8.7		37.7	3	
XI (f')			7		
XI' (f#')					
XII (g')			4.2		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第35番二長調 (Sinfonie in D<'Haffner-Sinfonie'>, KV385)

(1)Allegro con spirito, 4/4(J=1, Clarino・Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		12		78	
IV (c)	15	155	11	147	
V (e)	12	38.5	10	27.5	
VI (g)	93	88	124.5	103	80
VII (b)					
VIII (c')	171.5	30.5	169.5	40.5	164
IX (d')	42	22	97.5	66	
X (e')	18.5	6	32.5	12	
XI (f')			4		
XI' (f#')					
XII (g')			24		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*このほかに、Clarino I・II共にaが4ある

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino・Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)					
IV (c)	4	4	2	2	
V (e)	4	4	2	2	
VI (g)	12	12	2	8	6
VII (b)					
VIII (c')	2	2	2	10	16
IX (d')			6		
X (e')			8		
XI (f')					
XI' (f#')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

モーツァルトのシンフォニーにおけるトランペットの使用法

(3)Presto, 2/2(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		4		21	
IV (c)	1	65	1	73	
V (e)	2	70	2	63	
VI (g)	87.5	115.5	77.5	118.5	99.5
VII (b)					
VIII (c')	97	17	113.5	32.5	104
IX (d')	69	34	95.5	43.5	
X (e')	46		64.5	13	
XI (f')			5.5		
XI' (ff')					
XII (g')	5		9		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(4)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)					
IV (c)		2		10	
V (e)		4		3	
VI (g)	4	10	12	23	10
VII (b)					
VIII (c')	6	4	13	11	9
IX (d')	7	2	13	4	
X (e')	4		11	1	
XI (f')			2		
XI' (ff')					
XII (g')			1		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第3番ハ長調 (Sinfonie in C ("Linzer Sinfonie"), KV425)

(1)Adagio, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		2		16	
IV (c)		4.75		22.75	
V (e)				1.25	
VI (g)	2	6.25	16	5.25	4.25
VII (b)					
VIII (c')	4.25		22.75		4.25
IX (d')	5.25		5.25		
X (e')			1.25		
XI (f')					
XI' (ff')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(5)Presto, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		10		47.5	
IV (c)	3	69.5	2	102.5	
V (e)	4	22		22	
VI (g)	53.5	61.5	54	42	53
VII (b)					
VIII (c')	73.5	16	120.5	47	75
IX (d')	62	37	74.5	64	
X (e')	20		57	4	
XI (f')			25		
XI' (ff')					
XII (g')	1		8		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(2)Allegro spiritoso, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		2		7	
IV (c)		37+114		39+177	
V (e)	3	20+50		15+25	
VI (g)	20+37	68+58	25+31	89+59	44+46
VII (b)					
VIII (c')	43+138	33+33	43+179	38+35	43+139
IX (d')	63+42	17+4	83+44	30+11	
X (e')	48+38		58+42	0+2	
XI (f')	0+4		2+14		
XI' (ff')					
XII (g')			7+4		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*付加分はリビート後の音

交響曲第3番ニ長調 (Sinfonie in D ("Prager Sinfonie"), KV504)

(1)Adagio, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		13		35	
IV (c)		33.5		32	
V (e)		2.5		1.5	
VI (g)	13.5	2.5	35	4	8.5
VII (b)					
VIII (c')	33.5	2	32	4	30.5
IX (d')	2		4		
X (e')	4.5		5.5		
XI (f')					
XI' (ff')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(3)Andante, 6/8(J=1, Clarinoはin C, Cornoはin F)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		13.7		36.7	
IV (c)		52		11.3	
V (e)			3	8.7	
VI (g)	15		37.7	7.7	13.3
VII (b)					
VIII (c')	50.7		11.3	0.7	31
IX (d')			18.7	14.7	
X (e')			7.7		
XI (f')					
XI' (ff')					
XII (g')			1.3		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(2)Allegro, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)		58.5		145	
IV (c)		126.5		175.5	
V (e)	3.5	26.5		34	
VI (g)	94	55	161	88	85
VII (b)				4	
VIII (c')	186.5	75	116	10	113
IX (d')	34.5	12	85	62.5	
X (e')	29		96	6	
XI (f')			27		
XI' (ff')			3	1	
XII (g')	11		38	2	
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*このほかに、Corno I・II共にhが2、des'が2、Corno Iにes'が4ある

(3)Presto, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin D)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani D-A
III (G)	1.5	54.5		89	
IV (c)	3	72		91.5	
V (e)	2.5	14		16	
VI (g)	63	13	93.5	21	53.5
VII (b)					
VIII (c')	64.5	10	94	23	71.5
IX (d')	23	7	55	37	
X (e')	12		28.5	5	
XI (f')			10		
XI' (f#')					
XII (g')	1		6.5		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(4)Allegro, 2/4(J=1, Clarino-Corno共にin Es)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani Es-B
III (G)		60.5		66	
IV (c)		78		55	
V (e)	9	16		29.5	
VI (g)	70.5	4.5	68	53.5	62
VII (b)					
VIII (c')	69	1	81	33.5	75
IX (d')	16.5	9	53.5	44.5	
X (e')	4		42	7.5	
XI (f')			33		
XI' (f#')			3		
XII (g')			7		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*このほかに、Corno IにCが19、des'が2、es'が2、Corno IIにC'が19、cis'が1、es'が5ある

交響曲第3番変ホ長調 (Sinfonie in Es, KV543)

(1)Adagio, 2/2(J=1, Clarino-Corno共にin Es)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani Es-B
III (G)		37		38	
IV (c)		12.75		18.25	
V (e)				9	
VI (g)	37		47		36.5
VII (b)					
VIII (c')	12.75		18.75		10.75
IX (d')				3	
X (e')				2.5	
XI (f')			3		
XI' (f#')					
XII (g')			2.5		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

交響曲第41番ハ長調 (Sinfonie in C('Jupiter-Sinfonie'), KV551)

(1)Allegro vivace, 4/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		22+43.5		8+63.5	
IV (c)	1+1	35+72.25	1+1	45+85.75	
V (e)	1+3.25	4+8.25	1+3.25	10+17.75	
VI (g)	104+130.75	84.5+91.5	89+145.25	100.5+122.5	42+95
VII (b)					
VIII (c')	30+68	9+7.5	42+90.5	14+16.5	48+85.5
IX (d')	53.5+16.5	41+3.5	67.5+42.5	45+8.5	
X (e')	7+5.5		16+16	1+3	
XI (f')	0+0.5		1+6		
XI' (f#')					
XII (g')	2+1		7+13		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*付加分はリビート後の音

(2)Allegro, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin Es)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani Es-B
III (G)		13+64.5		37.5+61	
IV (c)	0+3	26+78.5	0+6	30+85.5	
V (e)	1+3	10+21	0+3	12+25	
VI (g)	31.5+96	27.5+36.5	54+83.5	42.5+41.5	38+66.5
VII (b)					
VIII (c')	29+77.5	29+3	31+78	30+15	31+77.5
IX (d')	60.5+18	34.5+14	65.5+30.5	44.5+21	
X (e')	16+16		22+35	0+5.5	
XI (f')	6		12+4		
XI' (f#')					
XII (g')	3+4		12+13.5		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*付加分はリビート後の音。このほかにCorno IにC、IIにC'がそれぞれ0+11.5ある

(2)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		8		22	
IV (c)	0.5	14.5	1.5	14	
V (e)	0.5	2.5	0.5	4	
VI (g)	37	32	49.5	39.5	33
VII (b)					
VIII (c')	15	1	16	5.5	23
IX (d')	12	8	27.5	22	
X (e')	1		6		
XI (f')			2		
XI' (f#')					
XII (g')			5		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*このほかに、Corno IにC、Corno IIにC'がそれぞれ1ある

(3)Menuetto, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin Es)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani Es-B
III (G)		38		38	
IV (c)		37		37	
V (e)	13		13		
VI (g)	13		37	4	17
VII (b)					
VIII (c')	24		24		26
IX (d')			5		
X (e')					
XI (f')					
XI' (f#')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

(3)Trio, 3/4(J=1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)					
IV (c)				3	
V (e)	15	15	15	15	
VI (g)				9	
VII (b)					
VIII (c')					
IX (d')					
X (e')					
XI (f')					
XI' (f#')					
XII (g')					
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

*このほかに、Corno IIにC'が1、Cが3ある

モーツァルトのシンフォニーにおけるトランペットの使用法

(4) Molto allegro, 2/2 (J = 1, Clarino-Corno共にin C)

Partial Tone	Clarino I	Clarino II	Corno I	Corno II	Timpani C-G
III (G)		56+16		72+12	
IV (c)	7	179+59	9	178+59	
V (e)	7+9	37+15	19+7	63+21	
VI (g)	152+36	201+26	135+23	205+30	
VII (b)					
VIII (c')	170+56	56+6	188+61	108+20	
IX (d')	159+12	60+4	206+24	74+8	
X (e')	81+7	2	127+26	6+4	
XI (f')	4		4+4	0+4	
XI' (f#')					
XII (g')	12+10		20+14		
(a')					
(b')					
(h')					
(c')					

* 付加分は2括弧の音